SVCF 通信
2019.8.23　Vol.113
公益社団法人 福島原発行動隊
東京都千代田区神田淡路町1-21-7
静和ビル 1階A室　〒101-0063
Tel: 03-3255-5910　Fax: 03-3525-4811
Mail: svcf-admin@svcf.jp　Web: http://svcf.jp

【転居された方は事務局（svcf-admin@svcf.jp）まで転居先をお知らせください】

財政足りても行動緩むこと勿れ

代表理事　安藤博

【予算通りに】

わたしたち福島原発行動隊（SVCF）の行動を支える団体財政につき、前7月(第112号）に続いて記します。前号では、寄付金/会費収入の減収で厳しい財政状況が露わになった2018年度決算を踏まえて、「財政難にあってもわれわれの行動が鈍化/萎縮することのないように」と「力説」しました(＜財政貧しても鈍することなく＞)。本8月号では、この「鈍することなく」をどのように実践するか―特に年度初めに決意した経費の徹底合理化に努めつつ「福島復興支援」を中心とする行動に邁進していくことを、2019年度後半から来2020年度に向けての活動方針(「財政足りても行動緩むことなかれ」)として述べることにします。

ここで、「経費の徹底合理化」に特に言及しているのは、以下の理由によります。即ち、前年度以来の財成窮迫化を見かねて、団体発足以来手厚い財政支援をして下さってきた会員からさらなる支援があったこと、であればこそ緩んでしまうことなく経費節減に徹しなければならないからです。

年度当初に立てた収/支額を前2018年度とほぼ同額(約180万円)とする予算は、今年度に入ってからいただいた「さらなる支援」のおかげでそのまま実行出来る見込みです。その要点は：

【収入】

前2018年度と同じく、会費収入60万円、寄付120万円、合計180万円を見込む。

会費(賛助会費年一口3,000円)の納入者は、全「会員」(2018年度当初660人)の3分の1程度でしかない。年度当初に行った会費増口のお願いと合わせて、未納会員に対する納付要請を改めて行わねばならない。

加えて、団体発足当初には「会費不要」としていた「行動隊員」(同558人)に対しても、改めて会費負担を要請することにしたい。

【経費の徹底合理化】

・賃貸料

各支出項目の中でいちばん大きいのは東京淡路町事務所の家賃(254,000円)で、前7月号に記したような団体収入の激減に対処するためには、事務所を返上する以外にはなかろう。今年度に入ってテレビ会議に力を入れているのは、「事務所無し」の団体運営を想定したためである。2018年度までと同等の収入を見込ことが、前述したように出来るようになった現在でも、この、「家賃負担を無くすこと」が経費節減のためのいちばんの課題であることに変わりはない。

他方、東京都心に月額2万円余で事務所を持つことが出来るのは、他の5団体と“同居“して家賃を分担しているからこそであって、この得がたい好条件を捨ててしまうには忍びないということもある。会員有志の特別カンパを集めてこの家賃負担を例えば半減することで、事務所無しに陥ってしまうのを免れられないか。

しかし、そうした方便を尽くしてまで事務所を維持する必要はないということになれば、2019年度いっぱいで事務所を返上することになろう。

・会報印刷費

印刷会社に外注していた会報(『SVCF通信』)の印刷を、2019年度に入って事務局メンバーが自前で行っている。東京・飯田橋のボランティアセンターに印刷用紙を持ち込んでセンターの印刷機、製本機を使って印刷/製本する。他の多くのボランティア団体もしていることで、これで少なくとも年15万円ほどの経費節減になる。

実は、SVCF メンバーの大方には、上記にようにして印刷したものを送っているわけではない。会員/行動隊員等メールアドレスへの一斉通信で各号を配信している。印刷したものは、（メールではなく）便送を望まれる方たち約 50 人と国会議員計 713 人（法定定数衆議員 465、参議院 248）だけである。

【行動】

・福島行きを計画的に

「行動隊」の行動は、福島に出向いて被災者たちと一緒に身体を動かすことが基本である。そのための最大のコストは、多くが首都圏に住むわれわれが「出向く」のに要する交通費等である。福島行きの経費合理化のためには、福島行きを無計画に繰り返すことをしないようにしなければならない。

この 8 月 26 日から 9 月 1 日までの一週間、３種/４カ所の作業（川内村ぶどう園枝葉刈り取り等、富岡町と大熊町の帰還困難区域内住居除草等、大熊町協働モニタリング）を連続して行い、9 月 1 日にはいわき市で今後の福島行動の進め方などにつき福島現地の人たちと話し合う。

・福島復興支援行動の拡大

大方の福島作業は、従来からの“縁故”者/地域で継続して行っている。2018 年度から富岡町役場に「支援作業募集」のポスターを掲示するなど一般公募を行っているが、応募ははかばかしくない。他の市町村でも公募の働きかけを行い、“縁故作業”から作業地/内容を広げることが急務である。

//

7 月 25 日院内集会

理事　伊藤邦夫

福島市飯野町山田猛史さんのお話をお聞きしました.

山田さんは, 原発事故前は飯舘村松塚で牛飼いの他にタバコの栽培なども行ういわゆる複合経営の農家だったそうです. 事故による被ばくのため, 本人は牛を連れて福島県内に避難し, 息子さんは京都に避難して牛を解体する会社に就職したそうです. その後の復興の過程では私などから見ると「ふーん, そういうことがあったのか」と思わず笑ってしまうようなことがあって, 現在では生まれ育った地で牛飼いを専業とする農家としてやって行こうと頑張っているそうです. 今まで何回か院内集会で福島の復興の核となって活動している方のお話を聞いて感じたのは, 熱心な農家, 篤農家にとっては,「今回の事故は好機をもたらしてくれた」のだということです.

復興の過程で帰村しない人が多いのは問題だと考える人は多いようですが, 一方では, 帰村しない人が手放す農業資源を帰村した篤農家の下に集約すれば, 持続可能な農村が生み出されることになります. 山田さんの話では, その地区でも除染の済んだ田圃で米作りを再開するために帰村しようとする人はほとんどいないそうです. 山田さんはその田圃を借りて牛の飼料用の米を栽培することになりそうだと言っています. 山田さん曰く,「俺は大地主だ, これを機会に孫子の代まで牛飼いを続ける基盤を築くべくまだ働くぞ」. 帰村を止めた人と山田さんとの違いとして大きいのは, 跡継ぎのあるなしだそうです. 山田さんの息子さんは京都への避難で得た牛の解体の知識も生かして牛飼いをすると言っているそうです.

私は聞いていて，元気の出る話でいいなあ，と思いました．山田さんの話の中には，東電からの賠償金とか政府の復興事業費からの補助金とかが多々出てきました．これらのお金の使われ方としては，山田さんの話しの中にでて来たような事項はおおむね正しい使われ方だと思われました．今後このような補助金が少なくなって行くとき，山田さんのような牛飼いがアメリカ・カナダ・オーストラリア・ブラジルなどにいるような牧畜業者と競合できるのかなとも心配になりました．この心配は，私たちは戦後，工業化への道を突っ走って来たわけですが，これからもそれで行けるのかなという心配につながっています．

閑話休題

ところで，私たち原発行動隊が事故の収束に寄与したしたいと考える原点は何だったのでしょうか．若い人の被ばくを少なくするために年寄りも被ばくをいとわない，は確かに原点といえるかも知れません．しかし，年寄りの被ばくの理由付け・正当化は何によるのでしょうか．私は“罪滅ぼし”だと思います．私たちは戦後の飢餓状態の中で，どうやって食料を調達すべきかの問題に直面しました．そのとき，工業製品を輸出して工業原料と農業製品を輸入するという技術立国の道を選びました．私自身も技術立国による食料問題の解決を目指して大学の工学部に進んだのです．

工業製品の製造には多量のエネルギーが必要です．その中で，そんな怪しげな技術はやめておけと警鐘を鳴らす人はいたにもかかわらず，私たちは原発を積極的に導入したのです．エネルギー・原料の大量消費の中で私たちは“食料が有り余るほどに豊か”になりました．この過程で起きた公害の一つが福島原発事故でした．公害の公害たる所以は加害者も被害者も一般の生活者であるということです．福島に原発設置を求めた私たちも原発を歓迎した福島の人たちも今回の事故の原因を作った加害者です．原発の近くにいた人の受けた被害と原発から離れたところにいた私たちの受けた被害には雲泥の差があります．この原発から受けた利益と事故による被害のバランスの私たちと福島の人の間にある違いを見過ごすならば，それは“罰当たり”です．

昔に原発の建設を求め，その恩恵を長年にわたって受けてきたにもかかわらず今回の事故による被害はほとんど無かったという私たちシニアの“罰当たり”な状況に対する“罪滅ぼし”が私たち原発行動隊の原点であると私は思います．

//

＜福島原発行動隊の発足後まもない 2011 年 5 月に行動隊員となった広島県の西本武彦さんから、あの大震災当時のことなどを記した手記をお寄せいただきました。忘れられないのは、福島原発の収束作業現場に飛び込むのに備えていち早く仕事を辞めてしまった西本さんが、うめくように言った「早まった」の言葉です。まだ四十歳台の若手だった“西やん”も、いまでは 2 人の孫を持つ立派なおじさん。それでも「現場」に対する思いは変わらず、2016 年 4 月の熊本阿蘇震災のときは、忙しい仕事の合間を縫ってオートバイで支援作業に駆け付けてきました。「やがて時間が取れるようになったら、今度は慌てずに」と、意気軒高です―編集担当安藤＞

いつかはまた行動隊の現場に

行動隊員　西本武彦（広島県府中町）

いまから八年前の三月十一日、東京都大田区北千束、いつも通り配送の仕事を終え自宅で休んでいた時だったと思う。それまで経験した事の無い揺れに驚き、いつもはあまり見ないテレビのスイッチをすぐに入れた。スタジオからの速報とともに各地の被害状況が徐々に、そして映像も交えて伝わって来た。その映像に驚き、更に大きな衝撃を受けたのはみなさんと同じだろう。

その時妻と娘の一人は勤務先に、もう一人は旅行中だった。携帯電話は繋がらなかったが、当時まだあまり普及していなかったネット経由の電話で幸いにも無事を確認する事ができ、とりあえず安堵したのを覚えている。（妻は新宿から車道に溢れる程の人混みの中を徒歩で四時間かけて帰宅。娘の一人は滞在先の長野におり無事。一人は帰宅出来なくなって友人宅へ泊めて頂いた）。我が家は散乱した落下物があるくらいで、申し訳ないくらい全く被害が無かった。

程なくして東京電力福島第一原発の状況がメディアから伝わるようになり、「これは大変な事になった、なん

とかしなければ…」と漠然と考えはするものの、いったいどうしたらいいのか、何が出来るのか全く分からなかった。そんな時ネットのTwitterで、原発を冷やすためのポンプ車を九州から福島へ搬送するのでドライバーを集めているとの情報を得た。すぐに応募したものの、私への返信は無かった。やがて余震も日常になってしまった三月末あたり、ようやく宅配便が被災地へ入り始めたと聞き必要物資を集めては送っていた。それがその時私に出来た唯一の事だった。

2011.9、平井秀和さん(右)と郡山へ除染に行ったときに

五月にネットで山田初代理事長の福島原発行動隊の活動を知った。第二回の院内集会に出席し、その足で新橋の旧事務所へお邪魔したのを覚えている。その時理事長とお話しをして頂いた中で、どちらかと言えば右寄りの私に対し、「事故収束に向けては右も左も関係無い」との言葉がとても印象に残り、私は行動を共にする事を決めた。そして私の日常とはかけ離れた、正しく多士済々の方々とお会いする機会を得た事は、本当に貴重な勉強をさせて頂いたと感謝している。

今では笑い話になってしまったが、そそっかしい私は福島原発行動隊として東京電力福島第一原発へ行くつもりで、八月には仕事を辞め自宅を年内に東京から引き払う段取りをしてしまった。しかしそれは実現せず、その年の年末に郷里の広島へ住居を移した。とはいえ、東京電力福島第一原発入りが実現すればすぐに馳せ参じるつもりでいた。

郷里へ移るまでの間は、震災の後片付けや除染のボランティア作業で福島に出かけたが、郷里へ移ってからは遠距離になった分、時間とコストの捻出が難しく二度ほど被災地へ行っただけになってしまった。現在では被災地へ毎年献花する事しか出来ていないのが、自分では不本意なところだ。

しかしボランティアなど考えた事も無かった人間が、東日本大震災以降は熊本や地元広島の水害など微力ながらお手伝いをさせて頂いて来た。今は高齢になった両親の介護もあり旅行すらままならなくなって来たが、やがて再び個人で時間が取れるようになったら、その時出来る事を今度は慌てず無理せずやって行きたいと思う。また今まで以上に家族を愛で、もちろん好きなバイクで日本中を旅したりと自分が楽しむ事も積極的にやりたいと思っている。

//

【行動隊8、9月スケジュール】

下記の会議・集会はどなたでも参加できます。

・8月日程(24日以降)

＜連絡会議＞

30金曜日(事務局員の多くが福島行きのためZoom)

・9月日程

＜院内集会＞ 26日(木曜)11-13時

＜SVCF通信113号＞発行日:27日(金曜)

＜連絡会議＞6、13、20、27の各金曜日。